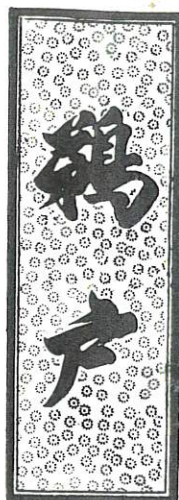


謹賀新年



発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷



新年のごあいさつ

宮司 長友安 美



新年あけまして
おめでとうございます
氏子崇敬者の皆様方におかれ
ましても、新しい希望に満ちた
新春をおむかえの事と存じま
す。

昨年、天皇后陛下即位五十
年と云う御歴代の中でも初めて
の慶賀申すべき御年に当られ、
国民挙つてお祝い申上げたので
あります。

同四十五年には社務所新築、同
四十八年には神門、儀式殿の新
築、更に年度の修繕等造営工事
で境内の整備事業も完成、ご社
頭の面目はみごとに一新され
た。

「神符守札庫」は、
御祭神ウガヤフキアエズの尊を
奉め奉ると伝えられる御陵墓参
考地(宮内庁所管)への通路と
して使用していたもので、これ
と同様に「下の御門」もあるがこ
れは明治十八年に建立され現在
に至っている。新しく建立され
た「上の御門」は、切妻造り銅板
葺きで建坪は約二・三坪ある。

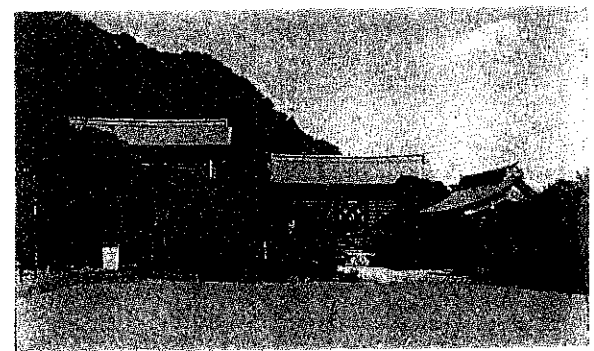
今年はこの新築成ったお社を
基盤として年間参拝者、二百万
人に及ぶご社頭の愈々のご隆昌
を期待しつつ役員一同、協心
協調進捗する所存であります。
最後に清安の御代と氏子崇敬
者の皆様方のご清安をお祈り申
上げます。

楼門、上の御門、神符守札庫 宝物庫の造営事業

国定公園日南海岸の中心に
鎮座の当神宮では、昨春四月よ
り天皇后陛下即位五十周年記念事
業として、総額二億円のぼる
楼門、上の御門、神符守札庫、宝
物庫の造営と境内整備事業を
進めていたが、このほど完成、
昨年末十二月十五日盛大に竣工
奉祝祭が執り行われた。当神宮
では、昭和三十三年の本殿改修、

物庫のご造営と境内整備事業を
進めていたが、このほど完成、
昨年末十二月十五日盛大に竣工
奉祝祭が執り行われた。当神宮
では、昭和三十三年の本殿改修、

「上の御門」は、寛永九年建立
されたが明治維新の際仏殿敷敷運
動の際焼却されてしまった。往
時は別当宮司等身分の高い人達
が方丈への出入口や、吾平山(景
御祭神ウガヤフキアエズの尊を
奉め奉ると伝えられる御陵墓参
考地(宮内庁所管)への通路と
して使用していたもので、これ
と同様に「下の御門」もあるがこ
れは明治十八年に建立され現在
に至っている。新しく建立され
た「上の御門」は、切妻造り銅板
葺きで建坪は約二・三坪ある。



— 右より上の御門、神符守札庫、宝物庫 —

(表紙写真は天皇后陛下即位記念事業として完成した楼門)
揮毫は 宮司 長友安美

「楼門設計監理」後記

工事設計監理者 湯 浅 重 雄

鵜戸神宮では、昨年初め天皇
陛下即位五十周年記念事業とし
て楼門建築の議が決定。その設
計の件、神宮より依頼を受け設
計に着手、昭和五十年三月二十
日此れが完了を見、三月二十五
日指名入札の結果、西松建設に
決定し四月九日現地に於て起工
式を行い、直ちに工事に着手致
しました。

何分昨年は、天候不順で雨が
多く工期内の完成が危ぶまれま
したが、西松建設の努力により、
工程通り同年七月十四日、上棟
式を古式にない厳そかに行い
ました。

途中、追加工事として上の御
門、守札庫、宝物庫並に玉垣を
施工して、工期も十二月十三日
迄として努力致しました。しか
し前述の通り雨が多く一時は
つになつたら完成するやらと懸
念されましたが、西松建設延岡
出張所よりの応援を受け文字通
りの昼夜兼行の工事となり、工
期ぎりぎりの十二月十三日完
成、その日宮司さん始め職員立
会の上検査を受け、工事の完成

設計管理者の私としまして、
西松建設の昼夜を問わないその
工事に対する努力には、感謝の
気持ち一杯です。

仕上がりは、総体鉄筋コンク
リート造り朱塗並にクリーム色
と配合宜しく、周囲の山の緑と
太平洋の海に良くマッチして、
海上より見る美姿はさながら竜
宮城を思わせる様で参拝者には
大変な評判であるという話を聞
いて、工事に携わった一人とし
て非常に有難く思つて居ます。
去る昭和四十二年、御本殿御
造営を始め、同四十五年火災に
依り焼失した旧社務所の新築、
同四十七年儀式殿並に神門の
建築そして今日の楼門、上の御
門、守札庫並に宝物庫及び玉
垣等次から次への御造営工事の
仕事に、何んらかの面で手伝さ
せて戴いた光栄は、本当に身に
余り、感激はひときわのものが
有ります。

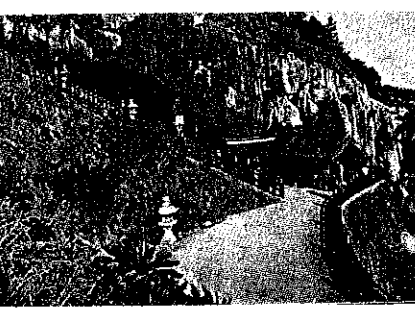
鵜戸神宮としての整備工事も
此れを以つて一段落したそうで
あります。
今後の御社運の隆昌をお祈り

工事を終えて

西松建設(株) 石 飛 清 治

楼門竣工おめでとうございま
す。引渡しを終えた現在の心境
は、娘を手離す父親の様に嬉し
い様な悲しい様な、そして淋し
い様な表現の仕様のない複雑な
気持ちです。

思いますに去る四月、御創建
以来約二一〇〇年という御神威
ある鵜戸神宮の御神域の中に現
場事務所開設以来八カ月余り、
全ての事が苦しみであり、その
苦しみの全てが喜びでもありま
した。工事期間二九〇日のうち、
三分の一以上の一〇〇日が雨と
いう例年にならぬ悪天候には作業
完全不能の日も数多く、天を仰
いで恨めしく思つたものです。



木造平屋建を鉄筋コンクリート
切妻造り銅板葺きに改築したも
ので、校倉式を取り入れたもの
である。また防湿にも一段と配
慮がなされていて朱塗りの両庫
は、背後の吾平山(景徳と調
和し一段と荘厳さを増してい
る。

境内地十四万坪の鵜戸山にこ
つ然として表われた楼門をはじ
め上の御門、神符守札庫、宝物
庫等は一大殿堂の様であり連日
地元の新聞、テレビ等が競つて
取材に来る、茶の間の話題とな
っている。

また楼門、上の御門同時進行は、
御本殿への参拝者通路の確保の
問題で私達を悩ませました。
鉄とコンクリートの現代建築
には強い私達も当初、神社建築
という全く未知な世界にとまじ
りませんでした。神社建築の魅力の
トリコになった時はすでに全工
事完了という次第でした。緑
に映える楼門、上の御門、神符
守札庫、宝物庫等の伝統的な日
本建築と、現代建築の見事な調
和は「空間の芸術」として私達
現場担当者を十分に満足させて
くれました。

夏の酷暑ときびしい残雪に作
業能率が低下することもありま
した。がしかし御神威ある鵜戸
神宮の工事に、「自分は死しても
楼門は残る。」という気持ちが作
業員の大きな励みになったよ
うです。ある職種のある作業員
は、「日本に数多くいる我々同
業者の中に楼門等神社建築の仕
事をした者は何人いるだろう
か。この職を続けてきて本当に
良かった。生涯の誇りである。」
と涙ながらに語つたものでした

西松建設のおしどり夫婦と言
う。任天妻に、初めての赤ちゃんが
誕生したのは工事の中程八月の
酷暑の最中でした。神宮のご利
益による安産でした。愛くるし
い女児は、楼門の優美な桂麗を
を頂き「美佳」ちゃんと命名さ
れたのです。現場のアイドルに
なったことは言うまでもありま
せん。

日向灘に突き出る鵜戸崎で、
仕事の帰りに釣りをしたり、潜
って魚突きをしたり、楽しいこ
ともありました。磯から日々
変つて行く現場を眺め、何とも
言えぬ感慨に浸つたものでし
た。又釣つた魚を着て飲む日南
焼酎の味は格別で忘れられない
ものになりました。
鵜戸山で経験した全ての一つ
一つが素晴らしい思い出となつ
たことはもちろん、全工事の一
つ一つが建築家としての私の血
となり肉となったことは、他で
は得られない貴重なものとなり
ました。これもひとえに長友宮
司様はじめ神宮職員の皆様、湯
浅重雄先生の暖かい御指導御助
言と鵜戸地区の皆様への御理解の
賜と深く感謝致します。
最後に鵜戸神宮の益々の御神
威の拡大と皆様の御健康を祈
り、御礼の言葉に代えさせてい
たきます。

おしるこ

権吉司 佐藤美春

新年おめでとございます。昨年は一方向ならぬ御指導と御協賛をいただきまして誠にありがとうございました。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

お蔭をもちまして、天皇陛下御即位五十年記念事業として、昨年春、造営工事を起しました桜門をはじめ、上の御門、宝物庫、守札庫、玉垣、それに境内の整備も順調にすすみ、去る十二月十五日めでたく完成をみました。ここに皆様方の心からなる御協賛に対し紙上をもって厚く御礼申し上げます。

完成しました朱塗りの豪華麗なる桜門をはじめ、其の他の建物、玉垣が背後の緑の山々に映え、前方は一望千里の大海原、まさに龍宮を彷彿させます。参拝者が「まこと龍宮じゃが(まことに龍宮でありますわい)」と感嘆して居ります。どうぞ皆様お揃ひにて是非今一度の御参拝をお待ち申し上げて居ります。

さて、お正月でありますので「おしるこ」のお話を一寸申し上げます。

「おしるこ」と聞きますと、聞いただけで口の中が甘くなり「おしるこ」は私達の祖先が伝えてくれました。お正月のお祝ひにかかせない食物の一つであります。小豆とお餅を主な材料としております。

昔の人は「忠実」という字を「まめ」とよませております。そこで「まめ」というのは、まじめ、誠実、真実な事、又身体が丈夫な事、健康、達者、すこやかな事を申すのであります。私達の幸福や喜びとは、まさにこの忠実(まめ)で健康でまめまめしく働ける事でありませぬ。

私達の祖先は赤い心(明るい清い心、真実)を尊んできました。その赤い心の表徴ともいえるべき小豆をめでたいお祝事に使ってきました。

私の故郷は雪の多い新潟県でありまして多くの男子は冬の間県外に働きにでかけます。この時家族の者が豆しほりの手拭をよく持たせてやるのを見受けました。この手拭はあかねけしいて、しゃ、一寸粋な手拭であ

りますので好んで持った様であります。私はこの手拭に家族等の、働きに行く人等がどうか忠実(まめ)で小豆(こまめ)に働いて、お金をうんとたくさんし

ばり取って帰って来て下さいという念願がこめられているのではないかと思っております。

餅は、古語で「もちひ」と言います。たくさんのお米の一粒、一粒が、自分の持っている力、ねばりを失うことなく充分に發揮して、自己を滅して一つにまとまっているのであります。このたくさんのお米の一粒一粒の霊が大きく一つになりまして、これを百千霊(もちひ)というのであります。

私等は人の手本になる事を龜鑑(きかん)、かがみと申して居ります。私等はここのもちひの鏡餅を年の始めにつくり、神棚をはじめ、先祖様へ供えて、どうか今年も各自が負持つ任務を、力を充分に發揮しつゝお務めをいたし、己が己の我をなくして鏡餅の様に一つにまとまって、円やかに円満な心になって皇室の御栄、国家安穩、家内安全、平和な世の中でありませぬ。と拜んでいるのであります。

そしてこの鏡餅を「おしるこ」にして戴き、忠実(まめ)で達者で自分の持つ力を充分に發揮し

つつ、自我をおさえ互いに助け合つて睦みなじみ、共存共栄の大和の精神を養つて来たのであります。

このおいしいお正月のお祝ひの食べ物の中に、なんとすばらしい祖先の教えがこめられているではありませんか。今更ながら祖先へ感謝の手を合せずにはいられないのであります。私達の祖先はこのおいしい食べ物をお正月のお祝ひの食べ物の一つにしなさいと「しるこ」という名をつけて子孫に伝えてくださった。

「しるこ」とは「知る故」であります。昔を知る事でありませぬ。遠い神代の大和民族の大元を知る事でありませぬ。昔を知らなければ新しい世に処してのよい見解は得られません。「知る故」はとりもなおさず「温故知新(おんこちしん)」であります。故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知ると読ませております。ふるい昔の事を研究して新しい知識を開いていく事でありませぬ。

昭和五十一年の元旦に当りまして、皆様と共に遠い祖先の業績をたずね其の御恩に感謝しつゝ、今年もこのおいしい「おしるこ」を戴いて、忠実(まめ)で、めで大和の世作りのお務め

御神幸祭

真夏の祭典鵜戸神宮御神幸祭は、毎年七月第三六、日曜日(日南市の港まつりに併せて)斎行されているが、昨年も七月二十、二十一日の両日盛大に執り行なわれた。

昨年は、ここ数年途絶えていた鵜戸獅子も氏子青年により復活され、御神幸の道楽も新しく考案され、それぞれ夜遅くまでの猛練習が行なわれた。この様に氏子民の御神幸祭に対する気持は、なみなみならぬものがあり、当日はひきしまつた顔が社務所の前に勢揃いし、お祭りは始まる前から盛り上がりを見せ

ていた。御神幸に先立ち石立の儀があり獅子を先頭に八丁坂へと向け出発した。三百年余の舐肥杉がうっ蒼と茂る、上り四百三十八段下り三百七十七段の石段を降りると目前に鵜戸港が広がる。港には、御座船第六光共丸五十九ト(ン)が神輿の到着を待ち受けていた。鮮やかに盛装された御座船に神輿が奉安されると「海上安全」「大漁満足」と記した幟をはためかせ、漁船百数隻の供奉のもと延々三キロに及ぶ一大船団が、日向灘を日南市の油

津港へと海上渡御し、太古を思わせる素晴らしい一大絵巻をくりひろげた。空からは自衛隊機による奉祝編隊飛行もあり、さらには無事油津港に上陸ののちは、百発に及ぶ奉祝の花火が打ち上げられた。その後、日南市内十数キロのパレードに移り自衛隊吹奏楽隊を先頭にパトンプラウズ、海洋少年団、交通少年団、地元漁協、商店街、青年団などの神賑隊約七百名がつづく盛大なお祭りとなった。

一方油津港周辺では、四半的大会、剣道大会等の数々の港まつり奉納大会が催された。また、自衛隊の体験航海など多彩な奉祝行事があり、夜は数千人の花火大会で賑ひ日南の街は祭り一色で塗りつぶされた。翌日はまだ人々の興奮のさめぬ午前中、御遷幸祭を齎行、油津港を後にして御神幸祭同様、御座船を中心に多くの漁船が供奉して鵜戸港にご到着になった。その後本宮へむかい、御遷幸祭(本宮)を執行して、猛暑の中、昨年の御神幸祭はつつがなく終了した。

昨年(本宮)を執行して、猛暑の中、昨年の御神幸祭はつつがなく終了した。

御神幸祭に参加して

鵜戸中学校三年 津田宗次

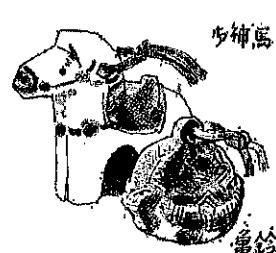
昨年の夏七月二十、二十一日の二日間、鵜戸神宮から日南市油津まで船で海をわたる祭典鵜戸神宮御神幸祭が執り行なわれた。

僕もこの両日部落の氏子民の一人として御神幸祭に参加した。今度三度目の参加である。この行事は、一日目に鵜戸神宮のおみこしが鵜戸の港から御座船のついで海をわたり油津港へと出発する。油津に着いて二時間あまり市中パレードがあり、おみこしは油津の御旅所に泊まれる。そして翌二日目に今度は油津港から鵜戸の港へとまた帰ってくるのである。僕はこのおまつりに供奉の一人として矛を持って行列に参加することになった。

まず一日目は、お昼ごろ参加する人達全員が鵜戸神宮の社務所に集まり白衣と袴に着がえて、各自が持つ威儀物がそれぞれにわたされた。午後社務所の前に神主さんや供奉に参加する人達全員が集合して神事後、八丁坂を登りお参りの人や商店街の人を見つめる中を鵜戸の港へと向った。港では大きな御座船が

をいたそうではありませんか。皆様方の御健勝と御多幸をお祈り申し上げます。終りに一言

「もしもし、おいしいおしるこのお話でありましたが、あなたのおしるこには砂糖(サトウ)が入っておりませんか。」「これはこれはどうも御注意ありがとうございます。実は入っているではありません。どこにかと申しますと、一番はじめの行をみて下さい。おしるこのお話をしておりますのが佐藤(サトウ)であります……」



立っていたことだと思ふ。

二日目は朝、油津港を一周した後、おみこしを御座船に乗せ今度は鵜戸の港へと向つていった。船が着いて港から僕達の行列は、鵜戸神宮へと出発した。八丁坂を一步一步汗を流しながら登ると、ようやく神宮に到着した。着いた時に「ようやく終わったのだ。」とホッとした。

この二日間、御神幸祭に参加して神宮のために少しでも役に立つかと思つと、本当にうれしかった。行列している時は真夏の暑さと長い間歩いたせいか、楽しいなどはちよっぴりも考えなかった。むしろ、「きついなあ。」とか「暑いなあ。」としか考えなかったけど、「もう少しだ。がんばるのだ。」と自分に言い聞かせて頑張った。だから終つた時は本当にうれしきでいっぱいだった。

今までは自分の住んでいる部落のことを本気で考えたことはなかったが、御神幸祭に参加してみても郷土のために、神宮のために、今からもしっかりと進んで協力しなければいけないと思ふようになった。だからこの二日間は僕にとって貴重な体験だったと思つている。

皇太子神社とこどもかぐら

鷺戸神宮の洞窟内に鎮り坐す末社皇太子神社(神武天皇の御兄君彦五瀬命)は以前、地元吹毛井部落の中央船形山に御鎮座であつたが、明治維新後神宮の洞窟内にお移し申し上げていた。その後は縁日の旧九月九日に神宮より皇太子神社の御神幸があり、その夜は元の社地である船形山の跡に御旅所をつくり一泊なされ、部落民が夜を徹して神楽を奉納しなかなかの賑いであつたそうである。

戦後若者がほとんど出稼ぎに出て神楽の後継者がいなくなり昭和三十三年を最後に御神幸も止まり神楽も遂に断絶してしまつた。

ために、近年部落の人々の間に皇子様を是非部落においてお祀りしたいという切なる願いが起り、たまたま神宮の楼門造営に伴い末社門守社の社殿を払い下げることになつた。部落でも今までの御旅所を改修することになり、払い下げの御殿を御本殿として十月十三日(旧暦九月九日)皇太子神社の御縁日の夜御分靈鎮座祭を執り行つた。

その御鎮座を記念して子供にもやさしく楽しく舞える神楽を考案し奉納したのが「こどもかぐら」の始まりである。

こどもかぐらは氏子の小学生十名が集い、獅子の舞、剣の舞、恵比須の舞、扇(鈴)の舞、献舞の舞をそれぞれが舞い、八名で舞う祝舞の舞もある。獅子はタ、タン、コ、タン、タン、タン、という太鼓のリズムを主としており、手拍子、竹拍子、鈴にあわせて舞いこどもだけでなく老若男女をとわず、だれもがでがらに楽しくゆかきに舞えやさしい舞である。

こどもかぐら

持原 浩 明

ぼく達は鷺戸小学校の生徒十名で十一月二十三日の勤労感謝の日、神宮にお祭りしてこどもかぐらを舞つた。



新嘗祭に奉納のこどもかぐら 献舞の舞

かぐらは昔大人の人が舞つていたそうですが、二十年位前からとぎれていたそうです。

今年から子ども達だけがかぐらをやるうじゃなやかと、神宮の人からぼく達にいわれた時は、胸がドキドキしてほんとうにできるのだろうかと思ひました。

ぼく達は学校の掃りがおそいので夜しか練習ができません。でも短い期間の練習の中でみんなワイワイ、ガヤガヤと騒いだり笑ったりしながらとても楽しいものでした。

ぼく達が初めて人前で舞つたのは十月十三日の夜で皇太子神社のお祭りの日でした。

部落の人たちがほとんど見物にきていたので、ぼく達はとてもあがってしまいました。二度目に舞つたのは最初に書

いた十一月二十三日の日で、この日は神宮で行いました。ちょうど連休だったので部落の人だけなく、新婚さんや団体の観光客の人がたくさん見物してましたので、ぼく達は「きれいにできるかなあ。」とちよつと心配でした。

でも舞い終わった後「大変よくできました。りっぱだよ。」と神宮の人達や見物の人達からほめられたので、とてもうれしかったことを覚えていませう。

これからも、こんなに楽しいこどもかぐらは、ぼく達の手でずっと続けていかなうてはならないと思つていきます。

こどもかぐらは、ぼく達の長い人生でこどもの時の忘れられない思い出になると思ひます。

社務日誌抄

六月十七日、秩父宮妃殿下一行(みなつききさ十五名正式参拜)

六月二十五日、熊野本宮大社 敬神婦人会五十三名参拜

七月六日、鷺戸神宮敬神婦人会三社詣り(大分県)

七月十四日、楼門上禊祭、権宮司以下職員参拜

参列、宮司、責任役員、工事関係者

七月二十日、七月二十一日 御神幸祭、宮司以下職員奉仕、供奉一〇〇名

八月七日、江の島神社相原宮司、茨城県神社庁和田副庁長正式参拜

九月一日、三〇日、香取神宮職員参拜

一〇月一三日、皇太子神社御分靈鎮座祭

一一月二三日、新嘗祭

宮司以下職員奉仕

一一月二七日、全国敬神婦人会立田副会長他三〇名参拜

一一月二五日、楼門完成奉祝祭、権宮司以下職員奉仕

参列、宮司、神社本庁統理代理(宮地嶽神社宮司浄見晴夫氏)責任役員他約一二〇名

新婚旅行いま・むかし

旧暦の三月十六日には、若草の萌える日南海岸七浦七峠から宮崎街道にかけて、盛装の花嫁を乗せた馬の群が鈴をシャンシャンと音も軽く行列をなして絡繰としてつづいたものである。

これは鷺戸、榎原両社への宮詣りの帰路である。新郎新婦の晴れの新婚旅行なのである。宮詣りをして、帰りの最後の宿で花嫁は化粧直し、髪を結い、衣服を着替える。親戚や隣中の人も多くはこの宿まで出向いて、迎へ宴を開くのが常である。

花嫁も花婿も軽装で、馬には鞍を置き布団を敷き花嫁の坐席をつくり、馬の尻には美しい尻掛を置く。首には、一足ごとにシャンシャンと軽く鳴る径一寸五分もある肥後鈴をつける。

旧三月十六日には、この盛装した花嫁を乗せ手綱を取る花婿の、長い長い行列があちこちに続き当日はあたかも祭礼の様であつたという。

(参考 鷺戸の宮居)

鷺戸さん参りのこの風習は江戸時代にさかのぼる。村ごとの「鷺戸さん参り頼母子講」に預金し、くじに当たった村の新婿代表五組が盛装の花嫁をのせた

職員異動(2)

(先号より)

四九、一〇、一 権宜に任ずる

〃 〃 〃 権宜に任ずる

〃 〃 〃 権宜に任ずる

〃 〃 〃 権宜に任ずる

五〇、三、一 巫子見習を命ずる

五〇、三、三 巫子見習を命ずる

四九、一一、八 願いに依り其の職を解く

四九、一二、五 願いに依り其の職を解く

四九、一二、二五 斎女を命ずる

〃 〃 〃 斎女を命ずる

五〇、三、一 巫子見習を命ずる

五〇、三、三 巫子見習を命ずる

五〇、四、一 社内権宜を命ずる

〃 〃 〃 社内権宜を命ずる

五〇、四、二一 願いに依り其の職を解く

五〇、五、七 願いに依り其の職を解く

五〇、一〇、一 権宜に任ずる

〃 〃 〃 権宜に任ずる

〃 〃 〃 権宜に任ずる

〃 〃 〃 権宜に任ずる

五〇、一二、二〇 願いに依り其の職を解く

権宜 香取辰夫

社内権宜 本 部 雅 裕

社内権宜 佐 藤 東

巫子見習 前 園 昭 子

巫子 小 玉 房 代

斎女 川 畑 八 重 子

巫子 垂 水 洋 子

巫子 河 野 慶 子

斎女 松 浦 三 惠 子

巫子 垂 水 洋 子

斎女 津 曲 美 代 子

巫子 垂 水 洋 子

斎女 黒 木 忠 仁

巫子 松 丸 三 喜 子

社内権宜 増 川 久 利

権宜 増 川 久 利

出仕 谷 口 正 史

巫子見習 金 丸 三 喜 子

巫子見習 松 田 三 惠 子

巫子見習 津 曲 美 代 子

巫子 土 屋 真 知 子

鶉戸山散歩 (2)

鶉戸沖一号井

去る六月、本神宮のすぐ下に見たす太平洋上にヒヨッコリ、船とも島とも判別しにくい「モノ」が出現した。今流行の怪獣かと思われ、職員一同大騒動したのであるが、それは後日、海底に埋蔵している石油を掘り出すための船、第三白龍号であることが分り一同安心したのである。

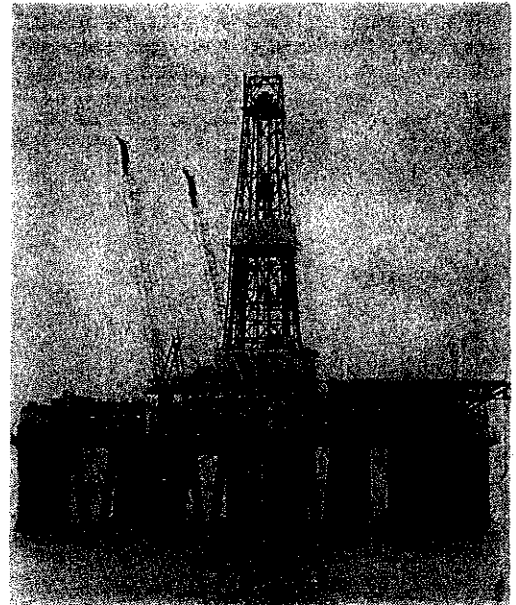
旅客飛行機と違い雑多な計器がむきだしでプラスチックかと思えるようなヘリコプターの機体は何とも信用がおけない。機外のプロペラの雑音と振動が身体全体をおそい尚一層不安をかりたてる。十五分もすると第三白龍号船上に無事着船した。まずはひと安心である。

この掘削工事にあたり、試掘位置が本神宮の沖十四キロメートルに位置するところから、その名を鶉戸沖一号井と名付け、工事の安全と成功とを祈願するお祭りを工事主の帝國石油株式会社から依頼され、六月二十八日職員三名が奉仕することになったのである。

全長一〇一メートル、全巾六十七メートルもある同船は、中央にボーリング用の四十七メートルのヤグラがある。すでに掘削工事は着々と進行しており、最終的には深度四〇〇メートルまで掘削作業を行うという。祈願祭は、船内の一室が充てられ、ひもろぎを設け、忌竹、メ縄を張りめぐらせて執行された。船内は禁酒ということ、乗組員一同酒を断って工事に従事しているのであるが、そこは神様のこと、ご神前にだけは神酒を始め種々の物をお供えし祝詞を奏上。工事の安全と石油、天然ガスの湧出を祈念して、下請各社の代表が玉串を奉りこの祈願祭の大方を終了したのである。

なにしろ斎場が海上であるため白龍号へはヘリコプターに乗って行かねばならなかった。宮崎空港のヘリポートをとび立ち掘削船へ向わんと白衣、袴の神主姿の上に救命具を付けてさっそうとのりこんだのである。ヘリコプターの窓からは日南海岸、青島神社等が一望できる。青島神社へは機上から失礼して一路白龍号へと向う。

この工は、外国の石油関



鶉戸沖一号井・白龍号

係の大会社が技術協力しているため、外人の参列者が多く二礼、二拍子一礼の作法を教えるのにもひと苦労。

さてこの試掘工事、結果は。石油も天然ガスも多量には湧出しないということになったようである。もとより地元の人々の間には「日南海岸は国定公園、自然環境を保護すべきだ」と主張する人。また「こういう不況下、産業開発が先決である」と石油の湧出を希望する人、こもごも意見が陸の上で戦わされていたのである。

ともあれ、海底四〇〇メートルまでをも掘り進むという近代科学の粋を集大成した石油産業であつても、神の降臨を願う日本人の神道への根強い信仰があることは否めない事実である。

我々神職はこういう普遍的な信仰をもっと大事にして日々の奉仕を致したいと思うのである。

第三白龍号君、鶉戸沖では苦しい思いをしただろうが、今年は君の年(辰=白龍)大海に出て一大奮起を望む。(本部)

あけまして

おめでとうございます
昭和五十一年新年号をお届け致します。本号は、今度完成した楼門を第一面に、カラー刷りにて皆様のお手もとにお届け申し上げます。また次頁よりは今年度の工事の概況をご紹介します。

宮崎県日南地方は、元日より、すこぶる天候に恵まれ、正月七日間は一つぶの雨も降ることなく、曇ひとつない日向灘の初日の出を拝めるという近年まれにない正月でありました。昭和五十一年は丙辰。

一年の計は元且にありと申します。当「鶉戸」も今年には年四回発行という計を立て順調な編集、発行を行ってまさに飛龍躍動の一年に致したいと考えております。

早春とはいえ寒さ厳しき折、皆様方のご健勝を祈り上げ、本紙への益々のご指導を賜りたくお願い申し上げます。(谷口)



編集後記